

5章 高麗大学・延世大学の大学間連携

——韓国事例——

1. はじめに

日本と同じく、「教育における国際化」(globalization of education)という現象は韓国においても例外ではない。むしろ、その現象が最も著しい社会かもしれない。韓国の各大学は、まるで争うかのように、1990年代半ばから「教育の国際化」に積極的に取り組んできている。たとえば、国際交流業務を担う関連部署の新設・拡大はもちろん、海外大学との学術交流協定、国際大学院という専門大学院の設立などに代表されるこれらの動きは、韓国的高等教育における一種の「ブーム」ともなったほどである。一方、近来では、アメリカを中心とする欧米大学との交流一辺倒から脱皮し(その傾向はいまだに根強く残ってはいるのだが)、韓国の大学は地理的に近いアジア地域の大学間交流の重要性を自覚し始めており、域内を視野に入れた「教育における地域化」(regionalization of education)に関するさまざまな取り組みを展開している。こういった意味では、韓国における「教育の国際化」もしくは「教育の地域化」はある程度その成果を出しつつあるといえよう。しかし、その成果というのは量的な面に偏り、中身のある実質的な大学間交流はそれ程進められておらず、まさにその「質の問題」が問われる時期に来ているというのが、筆者の厳しい現状認識である。

この「質」への疑問を確かめるため、本報告書では標記の「アジアにおける地域(大学間)連携教育」に焦点を絞り、それと関連する国際教育事業を行っている高麗大学と延世大学をその事例として取り上げることとする。「韓国の早慶」とも言われる両大学を選んだのは、この両大学は国立のソウル大学とともに、韓国的高等教育における最も影響力を持つ私立名門であるし、両大学の推進している地域連携プログラムの把握は韓国社会の高等教育の国際化における「質」を測れるバロメータになるからである。具体的には、高麗大学の場合は復旦大学およびシンガポール国立大学と連携する“S³ Asia MBA”プログラムを、延世大学の場合は慶應義塾大学および香港大学と共催する“3 Campus Comparative East Asian Studies”プログラムを中心に、その仕組みと中身の实態を明らかにする。

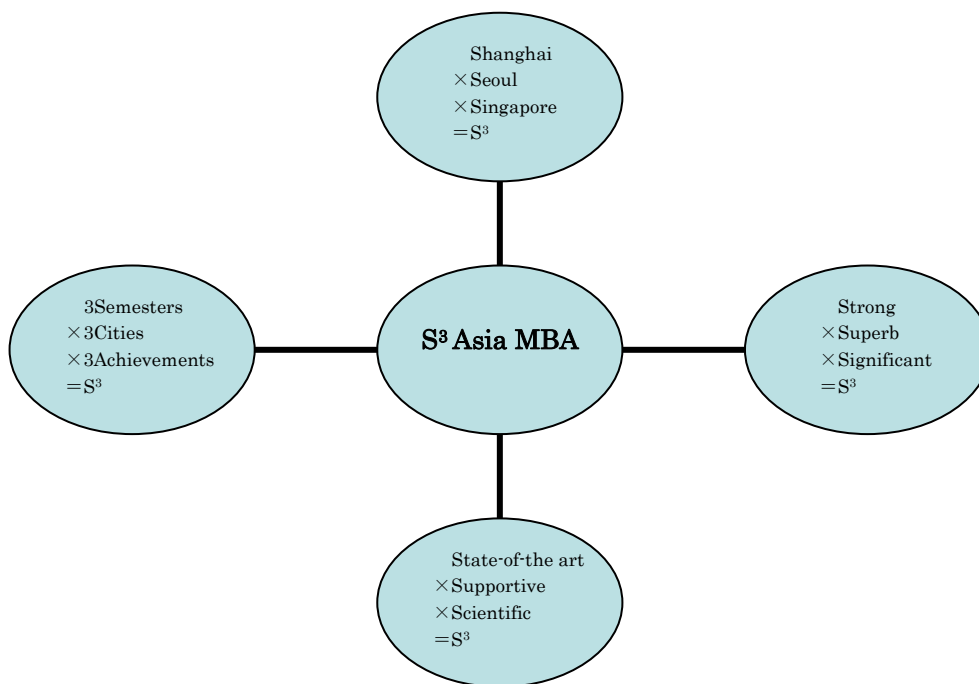
2. 高麗大学の場合——“S³ Asia MBA”

“S³ Asia MBA”は、高麗大学経営大学院 (KUBS, Korea University Business School)、シンガポール国立大学経営大学院 (NUS Business School, National University of Singapore)、復旦大学経営大学院 (School of Management, Fudan University) の3大学連携による経営学修士学位 (MBA) の取得プログラムである。拠点となる幹事校は高麗大学である。

まず、同プログラムを知るためには、その発足趣旨が非常によく込められているプログラム・タイトルを理解することが「前提」になるだろう。そのタイトルには、アジアにおける名門3大学3経営大学院が協働・連携をし、「アジア経営学を先導する」という意味が含まれている。経営学大学院が主導するだけであって、同プログラムに駆使されているマーケティング戦略の卓越性に驚かざるを得ない。“S³ Asia MBA”の中の‘S³’は、各大学が位置する Seoul (ソウル)、Singapore (シンガポール)、Shanghai (上海) の3都市名の英語イニシャルから取ったものである。それぞれの都市名のイニシャルがすべて‘S’で始まるのは「偶然の一致」であるが、その点を見逃さずに「必然的なもの」へ繋げていくそのマーケティング能力は極めて高いものである。「管理」と「規律」をより強調する国家名ではなく、都市名を用いることによって、同プログラムには「自律性」と「地域性」と「文化性」というイメージと性格が自然に与えられていると考える。国家に属しながらも国家を超える＝トランスナショナルなプログラムを志す高度な戦略であろう。

この‘S’と‘3’は都市名のみならず、他の多様で魅力的な英語イニシャルを組み合わせ、同プログラムの特徴と利点を分かりやすく示している。たとえば、以下の<図>のように、“The S³ Asia MBA Experience”では“3Semesters×3Cities×3Achievements”を、“The S³ Asia MBA People”では“Strong×Superb×Significant”を、“The S³ Asia MBA Engine”においては“State-of-the art×Supportive×Scientific”をそれぞれ組み合わせている。これらの表現を見る人々は、同プログラムの詳細内容を知らなくても、こうした簡潔で印象的なイメージとデザインに惹かれて「ぜひ一度入学してみたい」という気持ちになるのに十分な魅力を、同プログラムは有しているのである。

<図> “S³ Asia MBA”プログラムの概念



(筆者作図)

それでは、ここでは同プログラムの詳細内容を概観してみよう。まず、「入学」についてである。同プログラムでは、3大学からの共同運営委員会が組織されており、必要に応じて随時開催されているという。この委員会が決めた入学基準に基づきつつも、各大学の学則や独自性も最大限尊重している。たとえば、高麗大学とシンガポール国立大学に入学する学生は2年、復旦大学に入学したい人々は3年以上の職歴が必要である（復旦大学から学位をもらうためには論文提出も要される）。入学選考は同プログラムの「質」と直結する問題であるだけに、3大学共に優秀な学生の確保に最善を尽くしている。（同プログラムは2005年の構想段階から一定の準備期間を経て）2008年4月ようやく第1期生の入学が始まったが、3大学それぞれの入学定員は60～70人にもかかわらず、実際には各々20人程度しか合格させていない。その入学条件がどれほど厳格であるかが容易に窺える。これら約60名の第1期生はほとんどTOEIC点数850点以上で（ちなみに、同プログラムは入学から修了までのすべてが英語で行われる）、豊富なバックグラウンドを持った優秀な人材であるという。このように「厳選」された学生側も、第1期生としての自負心と責任感を強く感じているようである。大学でなく、学生自らがプログラムの「質保証」を意識す

る形である。この流れは、次の第2、第3期生の募集にも影響していくという考えを関係者の皆が常に認識しているのである。入学と関連して、もう一つ特記すべきことは、比較的多数の学生が最初の入学段階から同プログラムのために選抜されるという点である。既存の国際連携プログラムの大部分が該当する学部や大学院にまず入学し、後にその学生交換プログラムの一員として、しかもごく少数の人員が参加する程度のものであるのに比べ、“S³Asia MBA”はより本格的なプログラムとして位置づけられる。一方、以下の〈表1〉のように、地域ごとにその入学出願の枠が設けられていることも印象深い。たとえば、日本人がこのプログラムに参加したいなら、近い韓国の高麗大学に出願しなければならない。受け入れる対象地域も、アジア出身の学生に重点を置きつつ、域外の人々にも開かれている。

〈表1〉 入学出願の地域枠

高麗大学 (*幹事校)	韓国、日本、オーストラリア、ニュージーランド、EU 諸国、米国、その他
シンガポール国立大学	ASEAN 諸国、インド
復旦大学	中国 (香港、マカオを含む) 、台湾

(筆者作成)

次に、「カリキュラム」である。同プログラムは、1年半の間、3学期制で進められる。すなわち、それぞれの3大学で選抜された学生たちは、6ヶ月間の第1学期(オリエンテーションを含む)を上海で開始し、6ヶ月間の第2学期をソウルで、そして、最後の6ヶ月間の第3学期をシンガポールで送ることになる。講義の内容は、3学期の流れに沿った形で、さらに各大学の特化した科目を反映しつつ、基礎から上級へと深化・発展していく。言うまでもなく、それぞれの大学で取った単位はすべてお互いに認められる。学生達はこうした正規科目だけでなく、各地域の著名な専門経営者らとの出会いやインターンシップを経験するさまざまな機会も得ることができる。また、経営学専門の科目ばかりではなく、その地域や都市の歴史と文化と言語を学べる講義も多少あり、学生たちが「アジアをリードする人材」として必要な人文社会的教養を積めるような「配慮」もある。第2学期の高麗大学のカリキュラムには、“Business in Korea and Japan”という講義も設けられてお

り、日本の経営・経済を隣接する韓国で学ぶという、新たな観点からの試みも展開されている。

最後に、「学位取得」のことである。3学期を無事に終われば、学生たちにはダブル・ディグリー、つまり、二つの MBA 学位が授与される。一つは自分が入学出願した本属大学の名義入りの学位（必須）、もう一つは残りの 2 大学の中で自分が好む大学の名義が入った学位（選択）である。たとえば、高麗大学が本属である場合、中国という巨大な市場を意識する学生は復旦大学の学位を望むだろうし、東南アジアへの進出を目指す人々はその拠点となるシンガポール国立大学の学位を好むだろう。自分自身の将来により有利に作用すると思われる 2 大学の名義入りの学位を取れるということは、学生にとってこの上ない大きなメリットとなるに違いない。これに加え、“S³ Asia MBA”プログラムを修了した学生には、3 大学 3 大学院の 3 委員長（dean）の署名入りの修了証明書（certificate）も与えられる。

3. 延世大学の場合——“3 Campus Comparative East Asian Studies”

“3 Campus Comparative East Asian Studies”は、延世大学、慶應大学、香港大学など、韓・日・中の名門 3 大学の連携による学生交換プログラムである。前述した高麗大学のプログラムが大学院生をその対象とするのに対し、同プログラムは学部生を中心とする点が異なる。

キリスト教精神に基づいて設立された延世大学は、韓国の高等教育機関における最も「国際化」された大学として広く知られている。2008 年 5 月現在、全世界 59 国（地域）の 574 大学（機関）と学術協定を結んでおり、外国人留学生の受け入れも積極的に推し進めるいわゆる「インバウンド国際化」（inbound globalization）にも力を注いでいるという。国際学大学院も、韓国の中で最も早い 1988 年に設立された。しかし、ミッション・スクールという背景から、英語圏中心の欧米大学との学術交流に偏る傾向があり、アジア地域の大学との付き合いにはそれほど積極的ではないというイメージがやや強い。このようなイメージを払拭させるかのように、最近、延世大学は“East Asia’s Education & Research Hub”というキャッチフレーズを掲げている。アンダーウッド国際学部（UIC, Underwood International College）の設立、東アジア国際学部（East Asia International College）の新設、そして、この“3 Campus Comparative East Asian Studies”プログラムの運営も、延世大学のこうした「アジア志向」へのイメージ変身の一環として考えられる。

“3 Campus Comparative East Asian Studies”プログラムの運営体系および交流内容の骨子は、次のとおりである。同プログラムは、延世大学の場合は、上述したアンダーウッド国際学部の管理下に置かれている（慶應大学と香港大学の管轄箇所は確認の必要がある）。すべて英語で行われる同プログラムに参加する学生は、各大学から6名ずつ選抜されるという。3大学合わせて18名（第1期生は16名：延世6名、香港6名、慶應4名）の学生達が1年間のプログラムを共にすることになる。今後は、1大学の選抜枠を10名にし、3大学合わせて30～100名程度までに増やしたいとのことである。また、同プログラムは3学期制で運営されている。オリエンテーションを含む第1学期（秋学期）は慶應大学より開始され、第2学期（春学期）は香港大学、最後の第3学期（夏学期）は延世大学で開催される（現在、第1期生は香港滞在中である）。講義は基本的に「東アジア地域学」に集中されるが、それぞれの文化、歴史、言語などに関する選択科目も多く開設している。もちろん、学生たちが取得した単位はお互いに認められる。前述の高麗大学プログラムは単位認定に学位取得まで可能であったが、この延世大学プログラムは単位認定のみの水準に留まっている。各大学別の必須科目および学事スケジュールに関しては、下記の〈表2〉を参照されたい。

〈表2〉 必須科目と学事日程（2008～2009）

大学名	必須科目	学事日程
慶應大学	Special Study of International Relations in The East Asia	2008年9月25日～12月22日
香港大学	East Asia Political Economy	2009年1月12日～5月23日
延世大学	Workshop or Seminar on Comparative East Asian Studies	2009年6月29日～8月5日

（筆者作成）

同プログラムに参加する学生は、授業料を自分の所属大学に支払えばよい。航空料金や滞在費など、同プログラム参加に掛かる諸経費は、基本的には学生個人の負担となる。幸いに、慶應大学は学生一人当たり20万円の奨学金を支給し、香港大学と延世大学は寄宿舎を無料で提供する予定であるという。

4. 結びにかえて

以上、「アジア地域における大学間連携教育」に関する二つの韓国事例を取り上げてみた。今回の調査では、韓国の大学も高まりつつあるアジアのプレゼンスを自覚し、これらの大学間連携プログラムに大きな関心を寄せていることが確認できた。とりわけ、プログラムを実践させていく大学関係者（総長、学部長等）の強いリーダーシップの重要性、実務担当者のプロ意識と犠牲、そして、（プログラムを連携の大学が主体性と自立性を持って進めているため）国家の不在、という要素をも考えさせられた。

予想以上に着々と進んでいるため、やや評価しすぎた面もあるだろう。また、動き出したばかりのこれらのプログラムがどのように根ざしていくのか、連携パートナーの 2 大学は該当プログラムをいかに認識しているか、さらに、韓国の他の大学はどうなっているか、などの疑問が依然として残る。

比較的長い期間にわたって教育と生活を共にするこれらのプログラムを通じ、学生らは該当プログラムの「同門」としてのアイデンティティはもちろん、自己や国家の利害を乗り越えてアジアの平和と未来を考えられる「アジア人」としてのアイデンティティも芽生えていくことを期待する。もし日本が真のアジア版エラスムス計画を試みるなら、この「ソウル・モデル」から学ぶ点も多い。

【付記】本報告書の多くの内容は、高麗大学経営大学院の“S³ Asia MBA”プログラム担当者とのインタビュー（2009年2月18日）、延世大学国際処課長とのインタビュー（同年2月18～19日）、同大学アンダーウッド国際学部の“3 Campus Comparative East Asian Studies”プログラム担当者との国際電話によるインタビュー（同年3月6日）に依っていることをお断りしておく。ここに記して関係者の方々に深謝申し上げる。